長野大学紀要　第22巻第4号　1―16頁（313―328頁）2001

言葉についての省察 (2)
―― 言語哲学的研究 ――

Philosophical Consideration On The Nature Of Language (2)

大塚明敏・鈴木宏哉・葉石光一
Akitoshi Ohtsuka, Hiroya Suzuki, Kouichi Haishi

第2章　エドワード・サピーア（Edward Sapir）の説

1　人物について

1884年にドイツに生まれ、5歳の時からアメリカで育ち、1939年に他界した世界的に有名な言語学者であり、併せて人類学者でもある。

サピーアの言語学研究の生涯に最も重要な影響を与えたのは、同じ言語学者にして人類学者でもあったフランツ・ボアス（Frauz Boas（1858年～？）との出会いであった。

1904年にニューヨークでサピーアがボアスに会った時、ボアス46歳、サピーア20歳の頃である。

当時、サピーアは、大学院でゲルマン語の研究をしていた。

アメリカ・インディアン諸語について豊富な知識を持っているボアスに会って後、サピーアは、何もかもこれから学ばなければならないくらいに感化される。

その結果として、自分自身の文化環境にいる母国語資料提供者（native informant）を使うボアスの方法によって、アメリカ・インディアンの言葉の一つであるタケルマ語の記述、分析にチャレンジすることになる。

この研究は、サピーアにとって目新しい経験であり、印欧諸語の文法規範を他の全ての民族の言葉におしつけるという伝統的習慣からの根本的離脱であった。

サピーアは一生涯のうちに、普通のヨーロッパ諸語、ギリシャ語、ラテン語、ユダヤ語等の多くの古典語、中国語、アフリカの言葉であるグェアボ語などの研究論文を発表している。

しかし、主な研究は、アメリカインディアンの言葉についてであり、タケルマ語、クワキウトル語、チヌーク語、ヤマ語、ウイシュラム語、ワスコ語、ユート語、ヌートカ語、ナワトル語、シャイアン語、ウィヨット語、ヨーロク語、ユーモクス語、ナデネ語、クテナイ語、コアウィルテカ語、ハイダ語、チムシャ語、ナヴァホ語、その他の言葉まで及んでいる。

彼の同世代の人々にとってサピーアはまさしく天才であった。

彼の興味は、専門とする研究領域である人類学や言語学に限らず、科学的テーマから人文的テーマの広い範囲にわたっていた。

1917年から1931年の間に200以上の詩を出版している詩人でもあり、また作曲もやり、芸術、その他の分野で評論活動もするぐらいのマルチ・タレントであった。

今回の「言葉の省察」の研究に用いた「LANGUAGE－An Introduction to the Study of Speech New York 1921（言語　ことばの研究）」は、サピーアが書いた唯一の単行本である。

没後出版された本としては、Selected Writing of Edword Sapir in Language, Culture, Personality 1951がある。

2　言葉の本質のとらえ方について

彼の唯一の著書である「言語　ことばの研究

（LANGUAGE－An Introduction to the Study of Speech)」の分析により得られた資料である。

◦言葉は、生物的に遺伝した機能ではなく、文化的機能である。

◦言葉は、非本能的で、後天的な文化的機能である。

◦言葉は、長い年月の間持続した社会慣習の所産であり、社会集団の純粋に歴史的な遺産である。

◦言葉は、意味と結びついた慣習的な音声記号（sound symbols）の体系である。

◦言葉は、思想伝達の正規の型である。

◦言葉は、特定の社会の思想伝達のための伝統的な方法である。

◦言葉は、思想のある特定の表わし方である。

◦言葉は、その社会がそれによって全ての経験を表現する特定の仕方である。

◦言葉は、人間の社会それぞれが持つある特定の表現手段である。

◦言葉は、人間が社会の懐の中に生まれ落ち、社会がその伝統に導き込むことによって身につけるものである。

◦言葉は、歩行のような人間に固有な生物学的機能ではなくて、自分の置かれた社会環境の中から学習によって身につけていくものである。

◦言葉は、任意に創られた記号の体系によって、観念、情緒、または欲望を伝達するための、純粋に人間的で、非本能的な手段である。

◦言葉は、脳や神経系統、調音器官、聴覚器官等を統合して、所期の通達の目的へ向けて組織されるきわめて複雑で、絶えず遷移する網状組織的な調節運動である。

◦言葉は、生理学的な呼吸機能、摂食機能、心理学的機能等に被せられた一群の機能（overlaid function）である。

◦言葉は、人間の心的、または精神的構造の中で十全に形成された機能的体系である。

◦言葉は、一方では意識のあらゆる要素と、他方では聴覚、運動神経、その他の脳中枢や神経の域内に局定された要素の中から選ばれたいくつかの要素との間の、特有な記号関係、――生理的にいえば恣意的な関係――から成り立っているものである。

◦言葉は、恣意的な記号表示体系である。

◦言葉は、慣習的な、任意に分節された音声、またはそれと同価のものを、経験の種々な要素に割り当てたものである。

◦言葉は、経験に符牒をつける記号である。

◦言葉は、概念、つまり、数千の違った経験を抱含し、なおその上に、数千の経験を取り入れるだけの余地のある思惟の便利な莢（さや）に対する記号である。

◦言葉は、概念に対する記号である。

◦言葉は、人間の心の用の全般にわたることのできる道具である。

◦言葉は、意識の奥の内容の流れに併行するものである。

◦言葉は、特定の映像に左右される精神状態から、抽象概念やその諸関係だけが注意の焦点にあって、普通に推理作用と称せられる精神状態にわたる間の種々な水準上でも意識に併行しているものである。

◦言葉は、外的形態のみが常住不変であって、その内的意味、心的価値、あるいは強度は、注意、すなわち精神の選択的な興味につれて、また、いうまでもなく、精神の一般的発展につれても自由に変異するものである。

◦言葉は、本来、厳密には必ずしも思考と一体化していない先理的（Pre-rational）な機能である。

精々、言葉の記号的表現が最高に普遍的水準に達した時、思考の外部の面となるに過ぎない。

◦言葉は、その示す分類や形態の中に潜在し、結局はこの分類や形態と同一視されるかもしれない思考に達しようとつつましく努力しているものである。

◦言葉は、世間一般には、完成された思考につけられた究極の符牒であるかのように素朴に考えられているが、実はそうではない。

◦言葉は、思考の衣服ではなく、むしろ、あらかじめ用意された道、または溝である。

◦言葉は、本来は、概念の平面よりも低い用途にあてられた道具であるが、その内容の洗練された解釈として起ち上がってくると思考の道具と化すものである。

◦言葉は、思考の発生においても、日常の思索においても不可欠の手段である。

◦言葉は、人間の思考を方向づけ、促進する唯一のものである。

◦言葉は、それ自身のもつ構造によって思考の鑄型としての働きをするものである。

◦言葉は、思考の特定の方式である。

◦言葉は、外面的な聴覚的記号表示とともに脳内の言語活動である内面的な記号表示や無意識的な記号表示の機能をも有するものである。

◦言葉は、根本的には聴覚的な記号体系である。ただし調音されるかぎりでは、それはまた運動神経的な体系でもある。

しかし、言葉の運動神経的現象面は、明らかに、聴覚的なものに対しては副次的なものに過ぎない。

普通の個人では言葉に対する衝動が、まず聴覚映像の圏内に起こり、ついで音声器官を調節する運動神経に信号が送られる。

しかし、この運動神経過程やそれに随伴する運動神経感は、目的でも終極の休止点でもない。単に方便であって、聴者と話者の両方に、聴覚上の知覚を起こさせるべき調節作用に過ぎない。

言葉の当の目的である通達は、聴いた人の聴覚上の知覚が、適応した目指された心像または思考の流れに、あるいは、両者の結びついたものの流れに翻訳される時、はじめて成功したといえる。

したがって、言葉のループは、それが純粋に外部的な手段と看做されるかぎり、音声の領域に終始するものである。

最初の聴覚上の心像と、最後の聴覚上の知覚との間の一致は、通達過程の順調な進行を表わす社会的証印、もしくは保証である。

◦言葉は、調音される音声や、それを発するための諸運動から記号としての直接的な型式（pattern）を得ているものである。

話したり、聴いたりする際の記号表示であり、いわゆる話し言葉を意味している。

◦言葉は、経験や意味と結びついた聴覚心像やそれと関連して調音運動を誘発する運動神経心像、すなわち、聴覚―音声記号によって構成されるものである。

◦言葉は、世界中の民族すべてが文明度の如何にかかわらず普遍的に所有している文化である。

◦言葉は、人類の無窮の古代からの遺産である。

◦言葉は、人類の最も低い物質文化の発達にすら先立って発明されていたものである。

◦言葉は、その言葉を用いる社会によって同一のものとして暗黙の裡に容認される一つの部類に、その経験が結びつけられる符牒である。

◦言葉は、人間の意志伝達の方法であるに留まらず人間の精神が身にまとう目に見えない着物であって、精神の象徴的表現すべてに既定の形態を賦与するものである。

◦言葉は、いつでも人々の個性を明確にするものであり、また、明確なものたらしめることも可能なものである。

◦言葉は、人間の精神によって展開された最大の、もっとも巨大な作品である。

◦言葉は、われわれの知っているものの中で、最も巨大で、最も包括的な芸術であり、無意識の幾世代がものにした雄大な、しかも無名の作品である。

◦言葉は、大理石、青銅、粘土などが彫刻家の材料であるように、文学の媒材である。

◦言葉は、伝達可能なすべての経験に対する完全な表現形態を一つも欠いていない文化媒体である。

◦言葉は、文化、すなわち、社会的に相続され、われわれの生活の組織を決定する風俗、信仰などの集まりを離れては存在しないものである。

◦言葉は、一面において、形態より構成されているものである。

　音の形態、語の形態、文の形態、また音が働き、語が働き、文が働くその形態、さらに音群が成立し、語が成立し、文が成立するその形態、――すべて外的に見て言葉は形態的でない面はないものである。

◦言葉は、厳密な意味では、文化と因果関係があるとは言いきれない部分も有するものである。

　その理由は、文化はある社会がなし、また考えるところの「もの」であると定義できるのに対して、言葉は、思考の特定の方式であることによる。

　したがって、その社会で選択された経験目録（文化、すなわち社会のなした重大な選択）と、その社会がそれによって全ての経験を表現する特定の仕方との間に、どんな特殊の因果関係の存在を期待しうるかを明らかにすることは困難である。

◦言葉は、単なる内容なら、それが文化と密接に関係することは論をまたないところである。

　たとえば、馬について一度も見聞したことのない現地人たちは、その動物を識った際には、それに対する語を発明するか、または借用せざるを得ないことになる。

　ひとつ一つの言葉が、その仕える文化を多少とも忠実に反映するという意味では、言語史と文化史が平行線に沿って移ることは全く真実である。

◦言葉は、それ自体、統合的な表現の技術である。

　その中には、他のいかなる言葉とも完全に分有することのない特殊な一組の審美的因子――音声的、リズム的、象徴的、形態的、諸因子――が秘められているからである。

◦言葉は、特定の象徴的な関係である。

　生理的に言えば、一方においては全ての可能な意識要素、他方では聴覚神経、運動神経、その他の脳や神経の索に位置したある一定の選ばれた要素、この二つの間によこたわる恣意的な関係である。

◦言葉は、人間が現実世界に適応するための手段である。

◦言葉は、人間の現実世界を広い領域にわたって無意識的に形成するものである。

第3章　ルイス・マンフォード（LEWIS MUMFORD）の説

1　人物について

1894年ぐらいの生まれであるのでもし存命であれば多分100歳を超えているであろう。

アメリカのニューヨーク市立大学に学ぶ。

世界的に著明な文化人類学者のひとりであり、ライフ・ワークとして追求している研究領域は、「文明論」である。

「文明論」というのは、人類の文明が原始時代より現代に至るまで、どのようにして発生し、発展してきたのか、また、将来どのように発展していくであろうか、ということを考古学的な遺品、遺物、文化遺産、資料等の状況証拠と推論により解明し、説明し、予測するような学問領域である。

その意味では単刀直入に「文明論」の研究者としてとらえるのが最もぴったりした紹介になるのではなかろうか。

代表的な著作としては、

(1) The Story of Utopias (1922)
(2) Technics an Civilization (1932)
(3) The City of History (1961)
(4) The Myth of the Machine (1967)
(5) THE TRANSFORMATIONS OF MAN (1956)
(6) Interpretations and Forecasts: 1992～1972 (1973)

等がある。

いずれも、人間の持つ過去、現在、未来にわたる文明やテクノロジーとそれをとりまく社会との相互作用をテーマとしたものが研究の中核を占めていると見てよいのではなかろうか。

マンフォードの名声を初めて世界的にした名著が Technics and civilization (1932) であるとすれば、今回マンフォードの言葉に対するとらえ方について分析の主たる資料とする The Myth of the Machine（機械の神話　1967）は、彼のいわば長年にわたる「文明論」についての研究の総決算の著作と位置づけることができるであろう。

この本の中でマンフォードは、科学技術を重視する社会や、科学技術そのものの人間に対する意味を原始時代より現代にわたって検討を試みている。

2　言葉の本質についてのとらえ方

彼の代表的な著書の一つである「機械の神話 (The Myth of the Machine)」の分析により得られた資料である。

- 言葉は、人間の全有機体の深みの源から流れ出て、人類の祖先である霊長類の能力の上に構築され、欠けていた多くのものが加えられたものである。
- 言葉は、人間が動物状態から脱出するために最も必要とした自己変革の産物である。
- 言葉は、離ればなれで、必然的な束の間のすべての活動に価値を与える意味の基本型である。
- 言葉は、どんなに平凡な活動をも意味あるものとする呪術である。
- 言葉は、抽象的な概念を作り、観察したことを正確に描写し、確定的な情報を伝える手段である。
- 言葉は、知的伝達のための手段である。
- 言葉は、人間の生命を反映し、生命を高揚する道具である。
- 言葉は、最初から人間経験の生き身を抱くための道具であって、定義され得る観念を連結した白い骸骨のためのものではない。
- 言葉は、複雑な構造を持つものである。
- 言葉は、日常的経験の流れからある程度独立して、個々の環境や場面から分離することができる象徴的世界である。

◦言葉は、人間が創り出した一定の人間的制御の下にある象徴的世界である。

◦言葉は、人間が創造したものの中で最も触知できない、消えやすいものである。

◦言葉は、元来は人間の息吹きに過ぎないものが、たまたま最高に形を成して人間の成果となった創造物である。

◦言葉は、人間の文化や道具作り等の促進要因をなすものである。

◦言葉は、あらゆる人間行動の基盤であり、本質をなすものである。

◦言葉は、人類の発生以来、文化を生み出す手段であり、文化を永続させる手段である。

◦言葉は、世界そのものについて人間が最初に作った模型である。

◦言葉は、社会的共有と、相互的共感の拡大を促進するものである。

◦言葉は、複雑で秩序ある整然とした象徴の体系である。

◦言葉は、意識に向かっては精神の扉を開き、無意識に向かっては地階の扉をある程度閉め、ますます風通しよく明るくなった上階の部屋に地下の世界の幽霊や悪魔が近づくのを制限するものである。

◦言葉は、動物の使う固定的な合図が、はるかに広い意味を持つ身振りに変わり、それが更に複雑で秩序ある話し言葉に進化したものである。

◦言葉は、原初の意味づけである「具体的存在の意味づけ」を基礎として出発するものである。

　あらゆる存在は、星や岩であろうと、蚤や魚であろうと、それ自身を語っている。それ自身の形、大きさ、性質がそれであること示し、具体的にそれを象徴している。

　具体的存在が出会う人間の連想によって、その形と性質が人間にとっての意味を構成するのである。

◦言葉は、精神の自由を拡大し、精神の発達を促進するものである。

◦言葉は、これまでに作られたどのように複雑な機械も及ばないくらいの均一性、多様性、適応性、有効性を持つ手段である。

◦言葉は、儀式と共に、秩序を保ち、人間であることを確立する主な手段である。

◦言葉は、人間の創造力の基礎である文化的連続性と予測性を増進するものである。

◦言葉は、経験を、ますます複雑となる概念や観念構造に要約する機能を果たすものである。

◦言葉は、精巧な意味の構造を作り出す人間が人間となるための術である。

◦言葉は、人間のあらゆる活動の媒介手段である。

◦言葉は、親が子を養育することによって、世代から世代へと伝えられるものである。

◦言葉は、道具よりはるかに、人間が人間であることを確立するものである。

◦言葉は、人間の精神を直接表現する器官である。

◦言葉は、人間が人間によって人間になるように学習によって形成されるものである。

◦言葉は、子どもが生まれてから4年にもわたる母親の積極的な世話と心遣いによって身につけていくものである。

◦言葉は、人間の精神の直接的な表現の手段である。

◦言葉は、過去を呼び起こし、未来を予測し、見えないものや遠いものを見ることができる媒体である。

◦言葉は、事物、感覚、行為、出来事等と結びついた象徴である。

◦言葉は、抽象的な音声によって、現実の人々や具体的な場所や物体を思い出させることができる魔術である。

◦言葉は、同じ音声や似た音声を違った風に組織して、終った出来事を思い出したり、全く新しい事物を創案したりする更なる魔術である。

◦言葉は、人間自身の脳の測り知れない潜在力に釣り合う無限の潜在力に満ちた道具である。

◦言葉は、無意識の教育、統一され、安定した社会秩序の確立、社会的結合の完成のための手段である。

◦言葉は、直接的な事物や出来事を象徴的に翻訳する働きであり、同時に象徴の操作だけによって精神の中に新しい実体と情況を創りだすことへの移行である。

◦言葉は、離ればなれの社会組織を境界内に保つための統一作因である。

◦言葉は、表現的、情緒的機能と伝達の機能を持っていて、そのいずれもが文化の形成に重要な働きをするものである。

◦言葉は、一つの複雑な枝状構造をなすもので、その構造は、その概念全体において一つの世界像、すなわち現実の多くの構相を含み得る広い象徴的枠組を表すものである。

◦言葉は、絵や彫刻のように静的な表現ではなく、事物や出来事や過程や理想や目的の動く絵である。

そこでは、どの語も原初の具体的経験の豊かな陰影に包まれ、そして、どの句も、ただ時間と場所、意図と容器によって意味が変わる故に、いつもある程度の新しさを持つものである。

◦言葉は、人間の見る世界を意味あるものとする媒体である。

◦言葉は、人間生活のあらゆる機能、住まいのあらゆる様相、性質のあらゆる推進力に入り込んでいるものである。

◦言葉は、生きた人間に比較できるほどに目的に向かって自己制御され、高度に組織された構造である。

すなわち、経験のほとんど全ての様相を含んで事物を見分けるだけでなく、過程、機能、関係、機構、目標を解釈できる構造等を創り出すことのできるものである。

◦言葉は、主として概念的思考と組織化された知性の道具である。

◦言葉は、経験の主観的秩序化を、その意識と合理性の強さにおいて、儀式やタブーによって可能であった以上の段階に至らしめるものである。

◦言葉は、人間の主観的経験と道徳的規準を公式化し、自己意識を高め、自己認識と自己制御の力も等しく高めるものである。

◦言葉は、人間に対して指導的、形成的機能を有するものである。

◦言葉は、儀式と共に人間の社会的共同と制御のための最も古い手段である。

◦言葉は、人間を人間にするための基礎的手段である。

◦言葉は、複雑な意味の構造を創り出すものである。

◦言葉は、人間を熱中させる楽しみや遊びであり、社会的な仕事でもある。

◦言葉は、客観的混沌の中に流れ入って、それを人間自身の心象の中に再創造する精神の働きである。

もし、それがなければ、われわれのいない世界を把握し、理解し、言葉に表現することは、絶対に不可能であったと考えられる。

◦言葉は、経験のあらゆる部分に意味を浸透させて、人間が自分自身の存在の神秘に立ち向かうことができるようになることを目指すものである。

◦言葉は、正確な叙述や記録、並びに、制御され、組織された思考のための有効な手段である。

◦言葉は、人間が創造したものである。

◦言葉は、人間に他の動物が持たない力を与えるものである。

◦言葉は、意識の光を人間の空一杯に拡げるものである。

◦言葉は、人間の創造力の主な源である。

◦言葉は、力であり、武器である。

「勝つために、言葉の技に巧みであれ、人間の力は舌であり、言葉は戦いより強い故。」（エジプトの古王朝と中王朝との間の空位時代に書かれた「メリケレ王への訓え」）

◦言葉は、人間の行動に働きかけ、速やかに環境を形づくり、制御する効果をもたらす手段である。

◦言葉は、仕事をする上で有効に集団を組織するための堅固な基礎として無条件に畏敬される呪術である。

◦言葉は、「豊かな社会」において権力と地位を得るための主な手段の一つである。

◦言葉は、それ自身の中に精巧な工学技術のすべての属性を具えている道具である。

それらの望ましい特性は、目下開発中の機械的電子工学的体系の中にまだ翻訳されていないほどである。

◦言葉は、人間の行動に影響を与え、自然的事象を動物的知性の限界を超えて正しく解釈することを可能とする機能を有するものである。

◦言葉は、技術的手段としての他のどのような形の道具や機械よりまさっているものである。

◦言葉は、世の人々に気づかれていないが今もなお、他のあらゆる種類のプレハブや、標準化、大量消費のお手本になるくらい理想的な構造と日常性を有するものである。

◦言葉は、人間が作ったあらゆる社会的製品の中で、最も運びやすく、貯えやすく、かつ、最も普及できるものであり、おまけに最も気体的な文化的作因でもある。

それ故に、地球の生活の場を過密にすることなく、意味を無限に増加し、貯蔵できるただ一つのものである。

また、言葉の生産は、連続生産、取り替え、絶えざる発明ができて、しかも自動的拡大もできて、その上、無謀なインフレ、早過ぎる衰退といった今日の経済のような誤ちを防ぐ制御装置を内蔵した最初の真の豊かさの経済をもたらしたシステムである。

◦言葉は、文化の大きな容器である。

あらゆる言葉の持つ安定性の故に、更には、書き言葉がなかった時代においてすら、各世代は、前の世代の歴史の重要な部分を引継ぎ、受け渡すことができたのである。

◦言葉は、どれだけ外の場面が変わろうとも、人間をして、同類と共にいて自分自身の精神と親しむ内的な場を保たしめるものである。

◦言葉は、しばしば道具のように言われているが、むしろ、複雑な生きた構造の細胞として考える方が適切である。

特殊な場合に特殊な使い方のために機能するように秩序ある形に速やかに編成される単位として考える方が適切であろう。しかも共同体のどの成員もが、この言葉の組織の参加することができ、また、自分の経験の量と知性の能力、情緒的反応力と洞察力に応じてそれを使うことができるものである。

◦言葉は、大衆の（民族構成員全ての）共有財産である。

用法の階級的分化はあったが、記述方法の発明によるものは別として、いまだかって、少数の支配者に独占されたことはなかった。

◦言葉は、象徴作用や抽象作用を円滑にし、脳の生理的能力をよりよく生かすものである。

◦言葉は、儀式、美術、詩、劇、音楽、舞踊、哲学、科学、神話、宗教など同じく、毎日の食事のように人間の生活にとって本質的で不可欠のものである。

人間の真の生活は、生命を直接維持する仕事の活動にあるだけでなく、象徴活動（その代表的なものは言葉）にもあり、それが仕事の過程にも、その最終的な製品や成就にも意味を与えるのである。

第4章　クライド・クラックホーン（Clyde Kluckhohn）の説

1　人物について

言語学者や人類学者として世界的に有名であったエドワード・サピア（Edward Sapir 1884～1939）の次の時代を荷なうアメリカの代表的人類学者のひとりで、1905年に生まれ1960年に亡くなっている。

アメリカのプリンストン大学、ウイスコンシン大学、さらにはイギリスのオックスフォード大学、並びに、オーストリヤのウィーン大学等に学び、アメリカのハバード大学において学位を取得している。

職歴としては、ニューメキシコ大学助教授、ハバード大学主任教授、同大学附属ピーボディ博物館副館長、同ロシヤ研究センター所長等を歴任し、1947年にはアメリカ人類学会会長をもつとめている。

研究業績としては、アメリカインディアンのナバホ族についての調査・研究、文化とパーソナリティの関係の研究などで有名である。

著書としては次のようなものがある。

① To the Foot of the Rainbow (1927)
② Children of the People (1946)
③ The Navaho (1946)
④ Personality in Nature, Society, and Culture (1948)
⑤ Mirror for Man (1949)

戦後、日本にも数回来たことのある研究者でもある。

2　言葉の本質のとらえ方について

彼の代表的な著書の一つである「人間の鏡（Mirror for Man)」の分析より得られた資料である。

○言葉は、人間を人間らしくするものである。

○言葉は、動物の叫び声とは違って、一連の反応行動の一部としてのみ現われるものではない。

○言葉は、抽象概念を伝達し合い、現実にない情況について語り合うことができる道具である。

○言葉は、純粋に慣習的要素を多量に含んでいる純粋文化である。

○言葉は、無意識の世界の底に潜む心理的態度の手がかりを与えてくれるものである。

○言葉は、人間の生活と密着、一体化しているものである。

人間は、朝起きて夜寝るまで自分で言葉を話したり、積極的、消極的であれ他人の言葉を聞いたりして、主として言葉を使う環境に生きている。

人間は、独り言を言ったり、家族や友人と話したりするが、これは、相手と対話をしたり、相手を説得したりするためばかりでなく、自分の気持を表現するためでもある。

その他、言葉を通して、新聞・雑誌を読んだり、書物やその他の印刷物を読んだり、ラジオや説教、講義を聞き、映画を楽しんだりしている。(今日的に言えば、テレビやビデオ、CDなども含まれることになる。)

○言葉は、人間の直接経験の隅々にまで浸透している媒体である。

ほとんどの人間にとって全ての経験は、顕在的であると、潜在的であるとを問わず、言葉と密着しているものである。

自然愛好者たちが無数の花や木の名前を覚えない限り、本当に自然に触れたように思えないのもそのためであろう。この人たちは、あたかも、第一義的な現実世界が言葉の世界であり、何よりもまず、自然を切り取っている魔術的な数々の言葉を身につけなければ、自然を理解することができないとでも考えているかのように見える。

言葉と経験とがこのように絶えず相互作用を行っているところこそ、数学的記号や手旗信号などのような論理一筋の単純な記号体系の冷たさから言葉が区別される理由である。(マクミラン版『社会科学百科事典』1933年第9巻「言語」より)

○言葉は、思考伝達の手段である。

ただし、意味論学者と人類学者の意見が一致しているところによれば、この説明だけでは言葉のもつ機能のうちの、ごく限られた機能を示すにすぎない。

○言葉は、主として行動調整のための道具や手段である。

ある言葉の真の意味は、その言葉について辞書に書かれているものではなく、ある情況において、その言葉を用いることによってもたらされる変化や影響にあると言ってよかろう。

人間は、幻想や白昼夢の中で自分自身を慰め、いい気持ちに浸るためにも、うっ積をはらすためにも、自分にある種の行動を禁じて別のある行動へかりたてるためにも言葉を使っている。

対人関係で自分の主張を通すためにも言葉を使っている。

自分のことや、自分の動機などを表現する時にも言葉を使っている。

また、他人をおだてたり、甘言をもってだましたり、他人に抗議したり、他人を誘ったり、脅かしたりする時も言葉を使っている。

というように、言葉は、人間が人間に働きかける時の道具や手段としての意義を有している。

知識人中の知識人として知られている人の思想を表わすために用いる言葉ですら、感情や働きかけの意図がまじらないものは、極く僅かな部分を占めるにすぎない。

○言葉は、他人の感情に働きかける手段である。

○言葉は、人々をより効果的に働かせる社会的手段である。

○言葉は、社会的緊張を緩和する水路づけの役目を果たすものである。

○言葉は、その民族のもつ生き方や考え方と関係のある文化行動のひとつである。

○言葉は、その民族の文化の特色や、歴史を反映するものである。

したがって、その社会集団で用いられている言葉や語いからその文化がどのようなものであるかを判断することができる。

○言葉は、その民族の文化の独自性をあらわす指

標である。

この百年の間に死語に近かったハンガリーのマジャール語、アイルランド語、リトアニア語などが復活してきたのは、その例であろう。

◦言葉は、著しい情緒的性質をも有するものである。

◦言葉は、共有化されることによって、その社会集団の団結を協調する働きをするものである。

◦言葉は、その言葉を使う社会に共有されているものである。

そして、共通の言葉が使われていることは、その社会に他にも共通なものが存在していることを意味している。

どこの国でも同じで、特別な話し方をして、自分たちが特定の社会層に属していることを示そうとすることがある。このように言葉使いと社会的地位は表裏一体をなしているものである。

イギリス人の場合、その地位をネクタイと言葉の訛りから推量するのはそう難しくない、言葉の慣用的な言い回しによって、それを使う人の社会的地位や役割がわかる、などと言われているくらいである。

仲間や階級は、こういうやり方を無意識のうちに使って、より大きな集団にのみ込まれてしまうのを防いでいるのである。

「あいつは、われわれと同じ口のきき方をする」というのは、その人間を仲間と見なすということになるわけである。もってまわった言い方、特殊な愛称、隠語などは、階級や集団を表わすレッテルのようなものである。

◦言葉は、その民族の文化や、下位文化の持っている特有の香気を漂わすものである。

◦言葉は、辞書に出ている以上のさまざまに異なった意味を持つものである。

◦言葉は、違った物を、同じ言葉でひとまとめにしたり、実際は同じ物事を言葉の上では区別するということを絶えずしているものである。

◦言葉は、事物をさし示すだけでなく、事物と事物との関係、さらにその関係の客観的な面だけでなく、主観的な側面についても述べる働きをするものである。

◦言葉は、必ずしも物理的世界における事実を忠実に表現するものではない。

◦言葉は、人の心と心をつなぐ踏石となる長く使われてつるつるにすりへって、すべり易くなった通貨のような働きをするものである。

◦言葉は、客観的な事実だけでなく、つねに社会的情況も反映しているものである。

◦言葉は、考えや情報を交換するための伝達手段以上のものである。

◦言葉は、自己表現や情緒的表現を静めるための道具だけでもない。

◦言葉は、他の人に自分のして欲しいことをさせるための手段だけでもない。

◦言葉は、人間がそれぞれ、世界をどう考えるか、経験をどう解釈するかという独自の方法である。

◦言葉は、それぞれ、その構造の中に、世界と生活に関して、それを話す人々が無意識のうちにいだいている全ての仮定を含んでいるものである。

◦言葉は、人間が見たり、聞いたりする時、背後にあって働く感覚である。

人間がこの世界で起こることについて持っている観念は、あながち、全部が全部、外的な出来事によってもたらされるものではないということを意味している。

むしろ、自分の持つ言葉の構造によって無意識のうちに感じるように仕向けられたり、経験

するものの中から探し出すように訓練されているものである。

人間にとって母国語は空気同然のものなので、こういった事実とのズレには特に注意を払う必要がある。

◦言葉は、人間にとって空気同然の全く自然なものである。

ある言葉を使うように育てられている人間にとって、その言葉は事物の自然そのものであり、いつも現象の背景に存在するものである。

◦言葉は、人間の経験を整理し、解釈する分類箱であり、枠組である。

したがって、経験が言葉の決めた区分に従って整理され、解釈されるのは、あたかも季節が移り変わるように全く自然なことである。

しかるが故に、素朴な考え方をする人から見れば、これ以外の物事の考え方をする人間は誰でも、不自然な人間や馬鹿者であり、または悪者であり、少なくとも非論理的な人間ということになってくる。

◦言葉は、実際の経験や、事物、実態を便宜的に判然と区別し、割り切る道具である。

ひと口に「邪悪」といっても、色にたとえれば、真っ黒からいろいろの濃さの灰色にまでまたがっており、実際の経験にしても、「善」と「悪」とか、「精神」と「肉体」のように截然と区別できるような実体などがあるわけではない。

判然と区別できるのは、ただ言葉の上でのことにすぎない。

無生物の世界においてすら、無制限な「イエス」や無条件の「ノー」では答えられない多くの問題があることを現代の物理学は示唆している。

◦言葉は、観察、反応、自己表現を行なうにあたって人間を特定の方向に誘導する装置である。

中国語は中国人の、英語はイギリス人の、フランス語は、フランス人の、メラネシア語はメラネシア人の行動を方向づける働きを持つものである。

◦言葉は、その民族、その民族の経験の切り分け方を背後から指図するものである。

経験は言わば食べ物のパイのようなもので、いろいろな切り分け方があるが、それを指図するのが言葉だというわけである。

◦言葉は、その根源となる概念的形象に無意識的ではあるが、首尾一貫したその民族特有の物の見方、考え方、感じ方というものを構成する傾向を有している。

◦言葉は、必ずしも、感覚が経験したすべてや、経験に関するあらゆる可能な解釈を表現するわけではない。

人々が何を考え、何を感じるか、そして、その考え、感じるものを如何に報告するかということは、個人の経歴と実際に外的世界で起こることによって決められるものである。

しかし、それがまた、ある固有の社会の成員として人間が身につける言葉のタイプによっても決められるものであることは、しばしば見過ごされている。

したがって、その言葉が隠喩や伝統的なイメージを豊かに持っているか、どうかによっても差が生じてくる。

◦言葉は、通常意識しないその民族特有の習慣や思考方法を潜ませているものである。

◦言葉は、何を見るか、何を感じるか、いかに考えるか、何について語ることができるかなどについて、影響を及ぼすものである。

◦言葉は、言わば、「これに注目せよ」「これとあれを常に区別せよ」「これらのものは同類である」などと言っているようなものである。

人間は、幼児の時からこのように一定の反応をするようにしつけられているので、こういった識別を人生における不可避的な当然の要素と思い込んでいる。

◦言葉は、その民族特有の前提とか、基本的範疇、基本的な物の感じ方、世界観、経験を組織立てる仕方等を表わすものである。

◦言葉は、ある意味で、哲学（物の見方、考え方、感じ方）である。

◦言葉は、無意識のうちに現実世界を組みたてる働きをするものである。

◦言葉は、われわれが現にしているように見たり、聞いたり、いろいろな経験をする時、事物の解釈にあたってある種の選択をするよう、われわれをあらかじめ規制しているものである。

◦言葉は、人間に大きく影響を与えるものである。

◦言葉は、文化と呼ばれる物事の習慣的な理解の仕方に暗黙の影響を与えるものである。

◦言葉は、人間の思考をまとめ、規制するものである。

◦言葉は、人間の経験を分類するための手段であり、方法である。

人間は、「現実世界」に起こる出来事をただ機械のように感じたり、報告したりするものではない。

反応という行動そのものの中に、選択の過程も解釈も存在する。

人間は、外的情況の特定の局面にのみ注意を向け、他の局面は無視するか、または充分には弁別していないのである。

人間は、それぞれ、その経験を整理してしまっておく独得の分類法をもっている。しかし、こういった分類は、実は、言葉によって背後から操られているものである。

◦言葉は、通常意識しない、その民族、その国特有の習慣や思考方法をひそませているものである。

◦言葉は、人間の文化であり、哲学である。

第5章　フィリップ・ボック（PHILIP K. BOCK）の説

1　人物について

1934年にニューヨークに生まれる。1955年カリフォルニアのフレスノ大学を卒業。1955～1956年シカゴ大学大学院において人類学の修士号を取得する。後、ハバード大学大学院に進み、クライド・クラックホーン博士（第4章で紹介）の下で研究する。そして、カナダ東北部ミクマク・インディアンの社会構造に関する調査研究によって、1962年に博士号を取得する。同時にニューメキシコ大学に勤め、江淵一公氏が MODERN CULTURAL ANTHROPOLOGY のほん訳に着手したと思わる1970年頃には人類学教授の職にあった。しかもこの間、コロンビヤ大学、スタンフォード大学、メキシコのイベロ・アメリカーナ大学などの客員教授を務めている。また1972年以来、Journal of Anthropological Reseach（人類学研究）の編集をも担当しているその道の専門研究者である。特に社会構造、言語と文化の領域の研究者として知られている人である。

著書としては、

(1) The Micmac Indians of Restiguche, Bulletin No.213 National Museum of Canada,1966
(2) Peasants in the Modern World, edited, University of New Mexico Press 1969
(3) Culture Shock :A Reader in Modern Cultural Anthropology, edited, Alfred. Knopf 1970
(4) MODERN CULTURAL ANTHROPOLOGY an introduction 1970

等がある。

2　言葉の本質のとらえ方について

彼の代表的な著書の一つである「現代文化人類学入門（MODERN CULTURAL ANTHROPOLOGY an introduction)」の分析により得られた資料である。

◦言葉は、人間が自分の考えを他人に伝えたり、

たくわえたりする能力を著しく拡大させた書き言葉の基礎になるものである。

◦言葉は、人間の社会化にとって不可欠の手段である。

◦言葉は、人間の経験の範囲を拡大する上で不可欠の手段である。

◦言葉は、他人と意志の疎通をはかる手段である。

◦言葉は、いろいろな観念や関係、範疇や準則（プラン）などに満ち満ちている神秘の世界の扉を開くのを手伝ってくれる素晴しい鍵である。

◦言葉は、人間各自を社会へ統合するための主たる条件や手段である。

◦言葉は、文化化（encultulation)、すなわち、自分の社会の伝統を身につけ、人間がいかにも人間らしく振る舞うことができるようにする社会的学習のための最も重要な手段である。

◦言葉は、人間の社会的、文化的行動と同じく、本能に基くものではなく、学習によって獲得されるものである。

◦言葉は、人間の子どもが生まれつき持っている自分の共同体の言葉をすばやく、かつ効果的に習得する能力を基盤として周囲で使われている言葉を意味と結びつけてくり返し聞くことによって発達していくものである。

◦言葉は、慣習的規約に基づく了解であり、その人の属する共同体の文化の一部分である。

◦言葉は、人間が自分の社会の伝統を身につける媒介手段である。

◦言葉は、人間が自分の歴史と将来の可能性についての認識を獲得する媒介手段である。

◦言葉は、個人が世界を知覚し、処理する際、弁別を行なったり、こみいった準則（プラン）を定式化したりすることを助けてくれるものである。

こういったことは言葉なしには到底不可能であろう。

◦言葉は、語、句、文、詩、物語といった複雑な構造を持っており、こういうものと結びついているのが意味と呼ばれるものである。

◦言葉は、遺伝的に身につけているものではなく、子どもを養育している親が属している言語共同体の言葉を習い覚えるものである。

たとえば、ドイツに住むドイツ人夫婦の間に生まれた子どもが、日本語しか話さない日本人の間で育てられたとしたら、その子どもは、日本語を自分の母国語（言葉）として習得することになろう。

しかも、その子どもは、ドイツ語を習う際に他の日本人よりも有利な立場にあるということはないのである。

◦言葉は、高度に構造化された体系であり、またその獲得は大部分無意識の過程である。

◦言葉は、文化の学習というより一般的な過程と平行してその学習が進められていくものである。

◦言葉は、模倣および教授によって、かつ、また、他人の言語行動からの推論によって、各自自分の共同社会の言葉を習得するものである。

◦言葉は、ほとんどの子どもの場合、6歳ぐらいまでの間にかなり上手にしゃべれるようになるものである。

◦言葉は、人間各自が生涯にわたり、その能力、技能を磨き続けるものである。

新しい語彙（専門用語や俗語など）を習い覚え、異なる方言を身につけ、更には自分の個性を表現するとともに、社会的地位を指示するこ

とになるその人なりの話し方のスタイルを発展させていくなど……

◦言葉は、複雑な文化型を発展させ、伝達するという人間の能力にとって不可欠の要素である。

◦言葉は、人間の頭脳の働きである範疇の習得を促進したり、かつて出会ったことのない情況においてもどのように行動したらよいかを知る手掛りとなるものである。
　つまり、それは、一定の状況のもとで、同じ仲間の人びとが当人に言わせたいと思っていることを言えるようになることである。

◦言葉は、人間の経験する諸々の範疇に対する標示（ラベル）である。
　その標示（ラベル）のおかげで、われわれはじつに多様な事象や感覚をただ一つの項目にまとめたり、それらを他の事象や感覚と区別したりすることができるのである。

◦言葉は、経験的事実を範疇化する方法として、習慣になっているやり方や独自のやり方、あるいは思考の様式を反映したものであるとともに、それらを永続させるものでもある。

◦言葉は、それぞれ文法的、および意味論的体系を持つものであり、同時にそれは、それぞれの世界観を意味するものでもある。

◦言葉は、ある限られた数の、音の範疇ならびに意味をもつ要素の範疇、およびそれらと結びついた会話を行なうための一般的準則（プラン）から成立っているものである。

◦言葉は、規制や禁止事項をいっぱい持っているのと同時に解放性をも持っているものである。
　したがって、諸規則を習得することによって、他人と意志疎通ができるし、自分自身を自由に表現できるし、言葉なしには到達し得ないような目的をも、しばしば達成することができるのである。

◦言葉は、人間社会の持つ範疇と行動準則（プラン）の抽象的体系である。

◦言葉は、社会集団の構成員の間に共有されている期待を利用して無数の異なるメッセージを伝達することができる媒体である。

◦言葉は、言うことのできることに対して、慣例上の制約、それも大部分無意識的な制約を課すという働きをするものである。
　しかし、人びとはこうした制約を受け入れることによって、相互の意思疎通をはかる能力や自分自身と対話する能力を獲得するのである。

◦言葉は、それぞれの社会集団のもつ文化体系のモデルたり得るものである。

◦言葉は、社会の成員間の意志の疎通と相互作用を可能にする文化化の過程の触媒である。

(2001. 1. 9　受理)

引用・参考文献

1　エドワード・サピーア (Edward Sapir) 著　泉井久之助訳：「言語　ことばの研究 (LANGUAGE An Introduction to the Study of Speech)」　全254頁、紀伊国屋書店　1957年

2　B. L. ウォーフ (Benjamin Lee Whorf) 著、池上嘉彦訳：「言語・思考・現実 (Language, Thought and Reality)」　全345頁　講談社学術文庫　講談社　1993年

3　ルイス・マンフォード (LEWIS MUMFORD) 著、「技術と人類の発達　機械の神話 (THE MYTH OF THE MACHINE TECHNICS&HUMAN DEVELOPMENT)　河出書房新社　1977年

4　C. クラックホーン (Clyde Kluckhohn) 著　外山滋比古、金丸由雄訳：「文化人類学の世界　人間の鏡 (MIRROR FOR MAN)」　講談社現代新書　全229頁　講談社　昭和46年

5　C. クラックホーン (Clyde Kluckhohn) 著、光延明洋訳：「人間のための鏡 (MIRROR FOR MAN)」　全272頁　サイマル出版会

6 (1) フィリップ・ボック（PHILIP K.BOCK）著、江淵一公訳：「現代文化人類学入門㈠（MODERN CULTURAL ANTHROPOLOGY an introduction)」講談社学術文庫　全197頁　講談社　昭和53年

(2) フィリップボック著、江淵一公訳：「現代文化人類学入門㈡」講談社学術文庫　全316頁　講談社　昭和52年

(3) フィリップボック著、江淵一公訳：「現代文化人類学入門㈢」講談社学術文庫　全311頁　講談社　昭和52年

(4) フィリップボック著、江淵一公訳：「現代文化人類学入門㈣」講談社学術文庫　全211頁　講談社　昭和52年

7 F．P．ディニーン（Francis P. Dinneen）著、三宅　鴻、山中桂一、秋元実治共訳：「一般言語学（AN INTRODUCTION TO GENERAL LINGUISTICS)」　全606頁　大修館書店　1973年

8 J．T．ウォーターマン（John Waterman）著、上野直蔵・石黒昭博訳：「現代言語学の背景（Perspectives in Linguistics)」　全158頁　南雲堂　1975年

9 ディヴィッド・E．クーパー（David E. Cooper）著、大出　晃、服部裕幸共訳：「ことばの探究　その哲学的分析（PHILOSOPHY AND THE NATURE OF LANGUAGE)」　全422頁　紀伊国屋書店　1976年

10 G．A．ミラー（George A. Miller）著、無藤　隆・久慈洋子訳：「入門　ことばの科学（LANGUAGE AND SPEECH)」全195頁　誠信書房　1993年

11 鈴木孝夫著：「ことばと文化」　岩波新書　全207頁　岩波書店　1993年

12 鈴木孝夫著：「教養としての言語学」　岩波新書　全239頁　岩波書店　1996年